



# 緑色の部屋

LA  
CHAMBRE  
VERTE

脚本 フランソワ・トリュフォー + ジャン・グリュオー  
(ヘンリー・ジェイムズの短編小説の主題による)  
撮影 ネストル・アルマンドロス 音楽 モーリス・ジョーベール  
フランソワ・トリュフォー / ナタリー・バイ  
カラー作品・フランス映画・東宝東和提供

「大人は判ってくれない」の  
「アデルの恋の物語」の フランソワ・トリュフォー 監督

TOWA



私の愛も  
あなたのいのちも  
この部屋の  
炎の中に  
生きつづける。  
名匠トリュフォー「愛の映像」

\*世界中の誰よりも、日本の人々に見てほしいという、熱心なメッセージをもって来日した、愛の映画作家フランソワ・トリュフォー。彼は、この映画のテーマを一番よく理解してくるのには、繊細な情感をもつ日本人だろうと期待を寄せており、今回、エキブ・ド・シネマでの公開が決まったことを大変喜んでる。

「緑色の部屋」は「恋愛日記」(77)に続き、一九七八年に発表した作品で、長編十七作目。「大人は判ってくれない」(59)が、ヌーヴェル・ヴァーグの嵐の中で、若者の圧倒的な支持をうけてから二十年。ほぼ一年に一作の割合で、意欲的な創作活動を続けている彼の、ナイーヴな感覚と斬新な映像は、ますます、ファンを魅了している。

\*死んでしまった人を、生きている人と同じように愛することができたらどうか。

アメリカの異色作家ヘンリー・ジェイムズの短編小説「死者たちの祭壇」のテーマにひかれたトリュフォーは、これをもとにシナリオを書いている。共作者は「恋のエチユード」(71)「アデルの恋の物語」(75)と同様、ジャン・グリュオー。

死者は忘れられるべきなのか？もし、時を超えて、「死者」と生きている人間のよう

に固い絆で結ばれつづけるとしたら……。

「アデルの恋の物語」で、一人の男を、これほどまでに激しい心で、愛しつづけることができるのか！と強い衝撃を与えたトリュフォー。「緑色の部屋」では、「永遠の愛」の存在を、ソフトラな旋律と幻想的な映像の中に描いていく。

死は愛の終結ではないと願いながらも、死



という現実の前には、愛が想い出にかわり、想い出が忘却につながっていく……。しかし、彼は「この映画は、忘却に身を委ねることを拒絶する男と女の物語である」と語り、生きている人間と死者の間でも、深く情熱的に結びつくことが可能であることを、この作品で強調している。

\*

\*一九二八年、フランスの小さな町。

亡妻の実家の、調度品競売に行った中年の男、ジュリアンは、そこでセシリアという魅力あふれる若い女性と会い、妻の想い出の指輪を捜してもらった。彼女の、死に対する敬虔な態度とやさしい心に、ジュリアンは強くひかれた。彼は、老家政婦と聾啞の戦災孤児との三人で暮らしており、雑誌社で死亡記事を担当していた。愛する妻ジュリアンを、結婚後まもなく失った彼は、いつまでも彼女を忘れることなく、家の一角に、秘密の部屋を作っていた。ろうそくの光の中で、ジュリアンの肖像画や遺品に囲まれた彼の瞳は、いまでもこの部屋に生きつづけた。愛の深い理解を示すセシリアもまた、愛する死者をもっていた。不思議な感情に結ばれた二人。やがて、ジュリアンは古い礼拝堂を買いとりそこに、妻と、彼の心に残る愛する死者たちの「緑色の部屋」をつくった。一人、一人のためにろうそくをとまず姿をそつと見守るセシリア。彼らの間には、静かな愛が芽生えていた。しかし、ある日、セシリアの「愛する死者」の名前を知ったジュリアンは、苦悩と絶望のあまり、彼女の前から姿を消した……。

\*撮影は、今、フランス映画でもっともデリケートな映像をつくるカメラマンとして、高い評価を得ているネストル・アルマンドロス。パリ定住のスペイン人で、「野性の少年」(69)「恋のエチユード」「家庭」(70)と、トリュフォー・ファミリアの一員になっている。ろうそくの光を使った夢幻的なシーンや、緑色の闇につつまれた墓地のシーンなど、感動的な映像をつくりあげている。

使用されている音楽は、「巴里祭」「舞踏会の手帖」など、戦前のフランス映画音楽の名匠、モーリス・ジョーベール(一九四〇年死去)の作品。映画ファンで、この人を知らない人はないだろう。

「俳優そのもののイメージで、映画のすべてが決まってしまうのを避けるため、「俳優」以外の人間を使うことも必要だ」というトリュフォーの考えから、「野性の少年」「アメリカの夜」(73)について、今回も、ジュリアン役を彼自身が演じている。その他、アメリカのスピルバーグ監督に招かれて「未知との遭遇」に、フランスのUFO研究者役で出演した。

もう一人の主演セシリアは「アメリカの夜」「恋愛日記」でおなじみの、ナタリー・バイ。主人公が勤める雑誌社の編集主幹は、かつて、ジャン・ヴィグ監督の「新学期・操行ゼロ」の主演を演じた名優、ジャン・ダステ。

トリュフォーはフランス語版プレスの冒頭に、この映画のモチーフとテーマを要約する、次の三つの引用を掲げている。

「わたしたちの愛情が衰えるのは、相手が死んだためではない。わたしたち自身が死ぬからだ」

「マルセル・ブルースト宛たアルベルグの「夢を呼び起こすこの世にあるかぎりの物の象のなかでも、炎は最大の映像作因のひとつである」

「いつまでも、いつまでも心も愛もきみに捧げて」

「シャルル・トレネ(心も愛もきみに捧げて)」

監督フランソワ・トリュフォー  
LA CHAMBRE VERTE

カラー作品●フランス映画●東宝東和提供



# 緑色の部屋



2月9日(土)より  
エキブ・ド・シネマ  
ロードショー

●地下鉄(都営三田線)神保町・下車1分 国電(中央線)水道橋駅またはお茶の水駅・下車7分 ●神保町交差点

岩波ホール (262) 5252

お得な特別鑑賞券 880円

(当日は一般・学生とも1,300円)

音協会員に限り発売中!

平日(月-土)	1:00	3:30	6:30	上映時間
日・祝	12:00	2:30	5:30	■入れ替え制・自由定員制